

キリスト教の愛の思想 (その1)

—アガペーの本質—

松 田 央

Christian Thought of Love (1)

—The Essence of Agape—

MATSUDA Hiroshi

Abstract

Christian Love cannot be reduced to human feeling. It is impossible to think of love without the existence of God and human love rests on divine love in Christian thought. In other words the relation between God and a human being decides that between human beings.

Such a conception of love is designated in Jesus' teachings that are written in Synoptic Gospels. Jesus' teachings are told as two commandments, the first is 'You shall love the Lord your God with all your heart, with all your soul, and with all your mind.' and the second is 'You shall love your neighbor as yourself.' (Mat. 22: 37-39).

According to Donald A. Hagner the two love commandments belong together, covering the vertical (relationship with God) and the horizontal (relationship with others) dimensions.

Kierkegaard regards the second love commandments (You shall love your neighbor as yourself) as a human obligation. He thinks that love is assured eternally as long as to love is an obligation.

キーワード: アガペー、神の愛、隣人愛、イエスの教え、人間の義務

Key words: agape, divine love, neighbour love, Jesus' teachings, human obligation

I 二つの掟

1 聖書の釈義

社会通念における「愛」とは、人間同士のいつくしみの気持ちや恋愛感情などを指す。しかし、キリスト教の愛は人間の感情に還元されない。その特色を論考するためには、神の概念を避けて通ることはできない。キリスト教思想では、神の存在なしに「愛」を考察することはできないのであり、神の愛というものが人間同士の愛の根底にある。言い換えれば、神と人間との関係が人間同士の関係を規定しているといえる。

そして、このような愛の概念は、^{きょうかん}共観福音書（マタイによる福音書、マルコによる福音書、ルカによる福音書）に記録されているイエスの教えにおいて端的に示されている。

イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』。これが最も重要な第一の^{おきて}掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい』。律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている』（マタイ22:37-40）。

第一の掟は申命記6章5節の言葉「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」に基づくが、マタイはこの言葉と若干、異なる言い回しに変えている。また第二の掟は、レビ記19章18節の言葉「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」に基づく。これもマタイの本文と微妙に異なっているが、このような食い違いはそれほど大きな問題ではない。

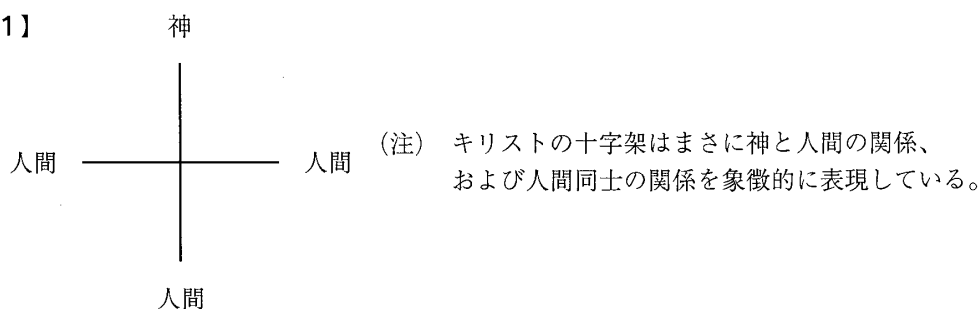
「掟」の原語は「エントレー」ἐντολήであり、これは神の命令、戒め、定めという意味である。一般に律法の一つひとつの命令を指す。律法（原語では「ノモス」νόμος）とは、広義では神の教えであり、モーセの律法（つまり法律）という形式でイスラエルに授けられたとされる。またモーセの律法はモーセ五書に見いだされるので、律法はモーセ五書を指すこともある。預言者とは預言書を指す。

ここからわかるように、二つの掟は本来、異なる書物に書かれている。しかし、イエスの時代にユダヤ教の律法学者は、すでにこれら二つの掟を結び付けていたようである。したがって、ここで提示されているイエスの教えそのものは、当時において格別革新的なものであったわけではない。

ただし、イエスは「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」と考えた。それは律法全体と預言者、すなわち、旧約聖書全体の精神がこの二つの掟に^{しゅうれん}収斂することを意味し、したがって、キリスト教会は、旧約の多数の掟をすべて守る必要はなく、この二つの掟だけを守ることで十分であると考えた。このようにユダヤ教に比べて、キリスト教の戒律はいちじるしく簡素となり、かつ愛の倫理として純化されることになった。

しかも、この二つの掟はキリスト教信仰の本質を規定しているといっても過言ではない。聖書学者ドナルド・A・ハグナーの釈義によると、第一の掟は、神と人間との関係、つまり、垂直の次元に属し、第二の掟は、人間同士の関係、つまり、水平の次元に属している。そして、第二の掟は第一の掟を前提とし、それに依存している。しかもいずれの愛も情緒的なものではない。すなわち、隣人愛は、私たちの活動の根本的な動機づけと目標として、他者の幸福のために他者に向かって行動することを意味する。また神への愛は、神への畏敬、関与、服従の事柄として理解されるべきである¹⁾。神を愛するという倫理の中には神を恐れ敬うという態度が含まれている。

【図1】



それゆえ、正しい隣人愛は、少なくとも聖書的な意味において、神を恐れ敬い、自分自身を信仰の領域に関与させ、神の意志に忠実に服従することによってはじめて、実現されるものである。神を恐れ敬うということは、神を全世界・全宇宙の創造者として認め、また人間の罪をあがなう唯一の主として認めることである。このような神への愛に基づかない隣人愛は、持続性や公平性を欠いたものに陥りやすい。

ところでマタイが資料として用いたと思われるマルコ福音書12章29-31節では次のように書かれている。

イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』。第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい』。この二つにまさる掟はほかにない」。

マルコ福音書のテキストの方がマタイ福音書のそれよりも申命記6章5節の文章に近い。しかもマルコ福音書のテキストでは、第一の掟は申命記6章4節と5節の両方を含んでいる。

「イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である」(申命6:4)という文章は、聖書学者クレイグ・A・エヴァンズの釈義によると、「唯一の神」を承認し、その神に従うという命令を暗黙のうちに示唆している。また唯一の神はイスラエルの神、ヤハウェと同一視されている²⁾。

次に「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして」という言い回しについて若干、説明しておく。「心」は原語では「カルディア」*καρδία*であり、「心臓」「心」「人間の精神活動の主体」を指す。この単語は、精神的な命と内的存在の中枢を意味する³⁾。

「精神」は原語で「プシュケー」*ψυχή*であり、「命」「人格的主体」「魂」「自我」を指す。ここで「カルディア」と「プシュケー」はほぼ同じ意味として使われている。また「思い」は原語では「ディアノイア」*διάνοια*であり、「知力」を指し、「力」は原語では「イスキュース」*ἰσχύς*であり、「力」「能力」を指す。

また「……を尽くして」とは、原語では「オロス」*ὅλος*であり、「全体の」「すべての」という意味の形容詞である。そこで原文を直訳すると、「心全体で、魂全体で、知力全体で、力全体で」という言葉になるから、要するに「自己の全存在において（自分の命そのものにおいて）あなたの神である主を愛しなさい」あるいは「全身全霊でもってあなたの神である主を愛しなさい」という意味に解釈することができる。

ここからわかるように、神を愛する度合いは、隣人を愛する度合いと、明らかに異なる。第二の掟では「隣人を自分のように愛しなさい」と規定されていて、隣人を自分と同等に愛することが要求されているにすぎない。これに対して、神を愛するということは、自分の全存在を賭けるということの意味するから、自分の存在よりも神の存在の方が重要なのである。

2 二つの掟の実践

第一と第二の掟の解釈において、一般の人々は、第二の掟の方が比較的実行しやすいと考えているようである。それはなぜかという、神は身近な存在ではなく、またそもそも自分は神を必要とせず生きていくことができると考えているからだろう。

しかしながら、現実問題としては、隣人を自分と同等に愛することも容易なことではない。むしろほとんど不可能に近いことかもしれない。イエスが要求している隣人愛は、たんなる慈善活動ではない。いうまでもなく、人間には自己愛があり、自己中心的な性癖が染みこんでいる。聖書ではそれを罪と呼んでいる。したがって、隣人の命を自分の命と同等に見なすことは、自然の感情にまかせるだけでは不可能な事柄である。

ところが他方で、多くの人間は、自己中心的な生き方をよしとしない。自分の利益だけを追求するならば、自己嫌悪の気持ちに陥るだろう。人間には本来、良心がそなわっているからである。私たちは隣人愛を理想としながらも、それを実現することができないというジレンマの中にある。

第一の掟は、このようなジレンマから脱出するために定められているのである。人間は第一の掟を真剣に考え、神と向き合うことによって始めて、第二の掟を実行することができる。なぜならば、人間は神を愛することによって、隣人を愛する力が与えられるからである。

しかも、第一の掟における二つの主題、「わたしたちの神は、唯一の主である」および「あなたの神である主を愛しなさい」は、相即不離そうそくふりの関係にある。新約思想において神が唯一の主であるということは、二つの次元において考察されている。

第一に聖書の神は天地万物の創造者であるから、全宇宙しゆの主、つまり主人である（イザヤ40:28；44:6）。人間存在も神の支配のもとにある。神が存在しているから、人間も存在しうる。

第二に聖書の神は、イエス・キリストの十字架と復活のわざによって人間の罪をあがなった。あがない（贖い）とは、旧約思想では元来、「買い戻す」、「交換する」という意味で、代

価や身代金を払うということとも関係する（レビ25:47-55）。そして、宗教的な次元のあがないとは、神が何かを犠牲にして人々の罪を許すという意味になった。たとえば、大祭司は民の罪の許しを神に願って、動物の犠牲をささげた。

ところが、新約聖書における罪のあがないは、人間が何かを犠牲にして神に許しを願うのではなく、神自身が神の子（イエス）を犠牲にして人間の罪を許すことを意味する。というのは、人間はどのような犠牲を払ったとしても、もはや自分の力で罪の問題を解決することはできないからである（ヨハネ1:29；13:10；ローマ3:10-26；5:6-11；ヘブライ2:17；7:26-28）。

人間はキリストの血によってすべての罪を清められた（Iヨハネ1:7）。キリストは救い主として人類を悪魔と罪の支配から解放し、神の支配のもとに連れ戻そうとしている。神の支配のもとに住むことによってはじめて、人間は真の自由を獲得することができる。

このように私たちは、聖書の神の創造とあがないの行為を通して、なかならずあがないの行為を通して聖書の神の愛を知ることができる。したがって、聖書の神を唯一の主として愛することは、この神の愛を信じて受け入れることにほかならない。言い換えると、自己の全存在において主である神を畏れ敬い、この神に服従するということは、この神の愛を全面的に受け入れることを基本にしている。この問題に関して、神学者ディートリヒ・ボンヘッファー（1906-45）は次のように語っている。

「何において愛は成り立つか」という問いに対して、われわれはさらに、聖書と共に答える。イエス・キリストにおける神と人間との和解の出来事において、と。[ここで]人間の神との分裂、ほかの人間との分裂、自分自身との分裂は、終りを告げる。根源は、再び人間に賜物として与えられる。

かくして、愛とは、そのことによって人間がその中に生きている分裂を克服し給うた、人間に対するあの神の行為である。この行為は、イエス・キリストを意味し、和解を意味する。従って、愛は、人間の上に起こったこと、受動的なこと、人間が自分では自由に処理しえないこと、である⁴⁾。

愛の反対は分裂である。私たちは互いに信じることができず、分裂している。また私たち自身のうちにも自己中心的な生き方と良心的な生き方とが分裂している。そして、人間同士の分裂と自分自身の分裂の原因は、神と人間との分裂にある。

私たちはある程度人間同士の愛を知っているかもしれないが、それは不完全で弱い。特定の対象へのかたよりもある。人間は神から離れることによって、神の愛を忘れてしまった。しかし、神の愛のみが、真実で完全で永続的な愛なのである。神は人間との分裂を解消するために自ら人間に歩み寄り、和解の出来事を行った。神はキリストによってこの世を自分と和解させ、人間の罪を問うことをしなかった（IIコリント5:19）。それゆえ、人間は神との和解を受け入れなければならない（同5:20）。そして、神の和解の提示は、キリストの受肉（人間となってこの世に到来すること）によって起こった。

神は、ひとり子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました（Iヨハネ4:9）。

神のひとり子キリストの人格において神の愛は啓示された。キリストはこの世のすべての人々を愛し、人間同士が互いに愛し合うことを教えることによって、神の愛を啓示した。このように「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子（キリスト）をお遣わしになった」（同4:10）のであり、ここに真実の愛が現実のものとなった。すなわち、神の愛が人間の愛に先行している。それゆえ、私たちはキリストの愛を受け入れることによって、真実の愛を経験することができるのである。また神がこのように私たちを愛したのであるから、私たちも互いに愛し合わねばならない（同4:11）。

ボンヘッファーが説明しているように、人間が神と隣人を愛するのは、神の愛であって、ほかの愛ではない⁵⁾。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」という第一の掟は、神によって愛されているということの中に含まれ、それを離れて定められているのではない。すなわち、神を愛するということは、神に愛されているということに気づき、感謝することである。

このように神の愛はあらゆる真実の愛の源泉である。私たちはこの愛を原動力としなければ、隣人を愛することはできない。

3 神の概念

すでに述べたように、第一の掟における「唯一の神」とは、イスラエルの神ヤハウェを指している。イエスはユダヤ人であり、旧約の宗教を信じていた。新約思想とそれに基づくキリスト教は、旧約の神の概念を継承しているから、キリスト教の神は、根本的には旧約の神ヤハウェと同一であるはずである。

そして、ヤハウェはキリスト教会によって、イエスという人格を媒介にして新しく解釈され、イスラエルのみならず、全世界の民を救済する神として宣教されるようになった。したがって、キリスト教は世界宗教として位置づけられている。ただし、キリスト教の神は「唯一の神」と見なされ、しかも新約聖書によると、人間は神の子イエスという道を通らなければ、その神のもとに到達することはできない（ヨハネ14:6）。

それではキリスト者は唯一神教的な神の概念を受け入れなければならないのだろうか。唯一の神を信じるということは、キリスト教の神と異教の神々が並列的に対立していて、キリスト者は異教の神々を排除して、キリスト教の神のみに従うということの意味するのだろうか。

もしそうであるならば、そのような神論は狭すぎるのではなからうか。もしキリスト教の神が本当に全世界を支配する神であるならば、イエス・キリスト以外にも神へと至る道は存在するのではなからうか。唯一神を信じることは、異教徒を敵視し、かえって隣人愛を妨げることにはならないのだろうか。このような疑問が生じてくるのである。

ところで18世紀後半に台頭したドイツ観念論哲学においてキリスト教の神論は、根本的に見

直されるようになった。たとえばシェリング (Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling 1775-1854) は従来のキリスト教の神論を批判している。ここではマルティン・ハイデッガー (1889-1976) の『シェリング講義』を参考にしてシェリングの神論を紹介する。ハイデッガーはシェリングの神論を次のように解釈している。

実存としての神、つまり実存している神は、こうした自分の内で歴史として生起する神なのです。実存はシェリングにあってはつねに、自分自身のもとに存在しているかぎりでの存在者を意味します。しかし、自分自身のもとに存在することができるのは、自分の外に出て、つねになんらかの仕方での自分の外に存在しているものだけです。自分の外に出て、そうすることによって自分の外に存在することを引き受け、こうして自分のもとに存在しているものであってはじめて、自分の存在の内的な歴史をいわば「^{アブソルヴィールト}修了した」(absolviert) ということになるのであり、したがって「^{アブソルテ}絶対的な」(absolut) ものなのです⁶⁾。

シェリングにとって「実存」には二つの側面がある。一つの側面は、つねに自分自身のもとに存在しているかぎりでの存在者である。神のみならず、人間も自由な精神を持っているから、その意味で自分自身のもとに存在しているといえる。

もう一つの側面は、自分の外に出て、つねになんらかの仕方での自分の外に存在しているものである。シェリングが考えている「実存」(Existenz) とは、「特定の観点で見られた存在者そのもの」であり、「自分から歩み出てきて、歩み出てくることにおいて自分を開示するもの」(das aus sich Heraus-treten und im Heraus-treten sich Offenbarende) のことである⁷⁾。

ちなみにドイツ語の ^{エクシステイレン}existieren (実存する) はラテン語の ^{エクシストー}existo に由来する。existo は「歩み出る」「出てくる」「出現する」「生じる」「成る」というような意味である。つまり、本来存在していたところからなんらかの仕方での自分の外側に歩み出て、そこで自分の存在を現すという意味を含んでいる。そこで実存することの前提として、自分自身のもとに存在するということが考えられている。

一見相反しているように思われるこれら二つの側面は、根本的には一つの事柄を指している。人間存在は単独では成立せず、他者との関係で成立する。人間は本質的に社会的・関係的存在である。それゆえ、真に自分自身のもとに存在するためには、人間は自分の外に出て、自分の存在を他者に現すことによるのみ可能となる。

言い換えれば、人間の自己とは固定的な実体 (一般に自我と呼ばれている) として存在しているのではなく、環境世界 (神、他者、自然など) との関係によってその都度成立するものである。したがって、人間は自分を愛するためには、必然的に環境世界を愛せざるをえないのである。

シェリングの神論に戻ると、彼はここでキリスト教の神論を前提にしている。キリストの教の神は普通の生き物とは異なり、それ自身で存在することができる。自分の存在の根底を自分自身の内に持っているはずである。その意味でキリスト教の神は絶対者である。本来神は自分自身のもとに存在していたはずである。

それでは実存としての神はなぜ自分の外側に歩み出て、そこで自分の存在を現す必要があるのだろうか。それは絶対者としての神が、世界や自然を超越しているから、人間はそのような神を認識することはできないからである。言い換えれば、そのような絶対者はまだ「神」として了解されていないのであり、したがって、まだ「神」という名前を与えられていないのである。人間が絶対者を「神」として知り、それに「神」という名前を与えるためには絶対者自身が、自分自身のもとから外に歩み出て、人間の前に出現する必要がある。

さらにいうならば、キリスト教の神は、人間を愛するという人格を持っている。新約聖書では「神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください」(Iヨハネ4:16)と書かれている。キリスト教の神の本質は愛である。つまり、実存としての神は、単独では存在せず、つねに人間を愛するという仕方においてのみ存在する。人間を愛さない神は、もはや神ではない。

したがって、神が自分自身のもとから外に歩み出て、人間の前に出現するということは、たんに啓示のためだけではなく、神が実存として存在するための条件なのである。神は本来、宗教的な枠組みを超えて、すべての人間を愛し、すべての人間の前に出現するはずである。そして、人間の立場から考えれば、このような愛の神を信じるならば、人間は神の愛の内にとどまり、排他的な一神教を捨てることができるはずである。

ところで神は絶対者であり、自分自身で存在している。いわば、自分の内に自分の存在の根底を持っている。しかし、すでに説明したように、神の内なる根底は神の外側に出ていないから、「神」という名前を付けることはできない。それゆえ、シェリングは、それを「神の内なる自然」(die Natur in Gott)と呼んでいる。これは神から切り離すことはできないが、それでも神から区別される存在者であるとされる⁸⁾。ここでいう「自然」とは、精神に対立する自然ではなく、むしろ精神と同一である。すなわち、自然科学の対象となる自然現象ではなく、存在者一般の形而上学的な世界を意味する⁹⁾。したがって、それは人間が直接感知したり、経験することができるものではなく、物質としての「自然」「宇宙」の背後にある根源的な世界であると解釈することができる。

このような「神の内なる自然」から実存している神は出現する。また現象としての自然や人間も出現する。したがって、実存している神も現象としての自然や人間も同じ根底から生じたことになる。

【図2】

自然 実存としての神 人間



神の内なる自然

誤解のないように断っておくと、このような神論は日本の宗教思想とは異なる。日本の宗教では神々は現象としての自然から生まれた。そこでは現象としての自然と根源的世界としての自然は区別されていないからである。したがって、神々といえども、現象としての自然を超え

るものではない。これに対して、「神の内なる自然」は現象としての自然を超越した世界である。

制度としての宗教は多種多様であり、宗教の数だけ神も存在しているように見える。しかし、シェリングの哲学を参考にすると、あらゆる^{しんてき}神的存在は元来、「神の内なる自然」から外側に出現したものであるということになるだろう。もしもキリスト教の神が真に「神の内なる自然」から出現した神であるならば、人間はこの神を通して根源的な世界に帰ることができるはずである。キリスト教以外の宗教の神についても同じことが当てはまるだろう。そのように考えるならば、いかなる宗教においても神の愛の本質は同一であるはずであり、愛の思想は普遍的なものであるといえるだろう。

II アガペーの基礎的分析

1 アガペーの現実性

新約聖書における基本的な愛は、「アガペー」ἀγάπη という名詞で表されている。その動詞形は「アガポー（アガパオー）」ἀγαπῶ である。この単語は神の愛のみならず、人間の愛をも意味する。すなわち、神が人間を愛する場合および人間が神を愛する場合だけではなく、人間が他者を愛する場合にも使われる。また信仰的に好ましくないものを愛する場合にも「アガポー」は使用されることがある。たとえば、「光がこの世にきたのに、人々はその行いが悪いために、光よりも闇の方を愛した」（ヨハネ3:19）と書かれているが、この場合の「愛する」の原語は「アガポー」である。

したがって、「アガペー」という単語そのものは本来、キリスト教的な愛を意味するとは限らないが、それが神の愛として使用される場合には、聖なるものを意味する。そして人間の愛も神の愛と関係する場合に限って、清められ、聖なるものとなる。そこでキリスト教神学の分野では「アガペー」は、一般的にそのような意味の術語として了解されている。本論文でもこの概念に従って、「アガペー」という術語を使用する。

すでに論考したように、アガペー（神の愛）は人間の愛に先行している。しかし、人間が神を愛さないかぎり、この愛は現実的なものとして経験されない。たとえば、神学者ニコラウス・クザーヌス（1401-1464）は、アガペーを「^{まなざし}眼差し」として形容している。

人間のこしらえたもののなかでは、「万物を観ている人物像」以上にわれわれの企てに^{あきわ}相応しいものが、私には見出されなかった。（中略）

あなた方のいかなる者がいかなる場所からそれを注視しても、それはあたかも自分だけがその人物像によって見つめられているような経験をするだろう。（中略）それゆえにあなた方は、まず、どうしてそれが同時にすべての人々と個々の人とを見つめるという、このようなことが成立するのか、と驚かされるであろう¹⁰⁾。

ここでクザーヌスは、神の眼差しを「万物を見ている人物像」の眼差しにたとえている。月の出た夜道を歩いているとき、どこまで歩いていっても、月が追いかけてくるような経験をし

たことがあるだろう。神の眼差しも同様であって、私たちがたとえ宇宙の端に逃げたとしても、神の眼差しは私たちに届いている。しかし、この眼差しは決して悪意のあるものではなく、それどころか愛に満ちたものである。

眼差しのあるところには愛があるのですから、あなたが私を愛して下さっていることを、私は身をもって経験しています。なぜなら、あなたの眼差しはあなたの僕である私の上に極めて慈悲深く注がれているからです。主よ、あなたの観ることは愛することです。(中略) あなたが私と共に存在して下さいる限りで、私は存在するのです。さらに、あなたの観ることはあなたの存在することです。それゆえ、あなたが私を見つめていて下さるので、私が存在するのです¹¹⁾。

このように神の眼差しは、人間を生かす愛の力である。ただし、それを感じるためには、私たち自身が愛をもって神を見つめる必要がある。つまり、「愛情を込めた顔をもってあなた(神)を見つめる者は、他ならぬ愛情を込めて自分を見つめていて下さるあなた(神)の顔を見出す」¹²⁾のである。したがって、アガペーは、神の愛のみならず、その愛を受け入れる人間の愛をも包括されてとらえられるときに、はじめて内実をともなったものとなる。

すでに述べたように、神の本質は愛である(Ⅰヨハネ4:16)。実は、神の愛はその外側に注がれるのみならず、その内側にも注がれている。クザーヌスはそのことを三位一体の原理によって説明している。

すなわち、父は愛する神であり、子は愛されるべき神であり、聖霊は両者の愛の結合である¹³⁾。このように神自身の内部に愛の交わりが永遠に行われている。当然のことながら、愛するためには対象が必要である。そこで神の本質が愛であるということは、神自身に複数のペルソナ(位格)が存在することによって可能となる。

このような理論の萌芽は、新約聖書においてすでに認められる。たとえば、イエスがヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受け、水の中から上がるとすぐ、天が裂けて、神の霊が鳩のように自分に降ってくるのを見た。すると、「あなたは私の愛する子、私の心にかなう者」という声が、天から聞こえた(マルコ1:9-11)。

ここでは三位一体の交わりが自然の情景を媒介にして簡潔に表現されている。本来、この交わりは、神の内部で営まれているが、人間の救済のために神の外側でも実現した。すなわち、子は現実の肉体を持った人間となり(子の受肉)、普通の人間として洗礼を受けた。それによって、天が裂けて、聖霊が降った。これは天と地、つまり神の国と人間の国の境界線を聖霊が突破し、聖霊の働きによって、二つの世界がつながったことを意味する。

聖霊がイエスに降ったということは、いうまでもなくこの世における子と聖霊との交わりの実現を示している。また天からの声は父なる神の声であり、詩編2編7節とイザヤ書42章1節の混合引用である。これにより、父は子を愛し、また子は父の意志に忠実に従っていくことが啓示されている。そして、イエスを愛する者は、イエスと同様に、父の意志に従い、父の計画をこの世で実現していく。したがって、神の本質が愛であることは、イエスの活動によって、

またイエスに従うキリスト者によって宣教されたのである。

2 神の愛と隣人愛

キリスト教思想家セーレン・キルケゴール（1813-1855）は、『愛の業』という著書の中で、アガペーの概念を考察している。そこでは二部に分かれていて、キリスト教的な愛の行為、つまり、隣人愛が本来どのようなものであるべきなのかということが論じられている。またこの著書の副題は、「談話の形式による若干のキリスト教的省察」である。この場合の「省察」とは、M・ジェーミー・フェレイラの解釈によると、愛の定義を所与のものとして前提にするのではなく、それを覚醒させ、刺激し、その思想を鋭くさせることである¹⁴⁾。

なお隣人愛の記述に比較すると、神の愛に関するそれは、少ない。しかし、キルケゴールはたんに道徳的な義務としての隣人愛を説いているわけではない。彼は隣人愛の基本に神の愛が存在していることを第一部の本論の「祈り」において明示している。

汝、愛なる神よ、天にあっても地にあっても愛はことごとく汝から由来するのです。……されば愛する者はひとえに汝の内にあることによるのみ愛するのです！ 汝が、愛の何たるかを明かし給いし汝が、万人を救わんがために汝自身を捧げ給いし我らの救い主にして贖い主なる汝が忘れられて、愛についてどうして正しく語りえましょう！ 汝、愛の聖霊よ、汝が忘れられて、汝自身のものを何一つ手にし給わず、されどかの愛のいけにえを想い起こさせ給い、信ずるもの〔信仰者〕には自らが愛されたごとく愛し、自分自身のごとく自らの隣人を愛すべきことを想い起こさせ給う汝が忘れられて、どうして愛について正しく語りえましょう！¹⁵⁾

キルケゴールは、この祈りを『愛の業』の冒頭に置くことによって、キリスト教の隣人愛が神の愛を根拠にして実践されるべきであるということを主張しているのである。フェレイラが解説しているように、この祈りは、「恵みの優先性」というルター派の原理が念頭に置かれている。すなわち、神が私たちを愛したことを私たちは思い出す必要がある¹⁶⁾。

もし私たちが隣人を愛することができるのであれば、それは私たちの力によってではない。私たちの愛は私たち自身からではなく、神の愛から生じる。私たちは神の内にとどまることによって、はじめて隣人を真に愛することができる。それゆえ、私たちは愛の源泉を神に求めるべきである。おそらくキルケゴールは、読者が『愛の業』の各箇所を読むたびに繰り返しそのことを思い起こすことを要求しているのだろう。

ここでキルケゴールは三位一体の交わりそのものに言及していないものの、三位一体の視点から神の愛を語っている。父の愛は、具体的に子と聖霊の働きを通して啓示される。すなわち、子は自分の命を私たちに捧げることによって神の愛を示した（ローマ5:8）。愛は神から与えられる賜物であり、しかもキリストの死を通して新しい形で授与された。

またそのことを信じることができるのは、私たちの理性によるのではなく、聖霊の力による。聖霊を受け入れる者は、キリストを受け入れることができ、またキリストの愛のわざを思い起

こし、理解することができる（ヨハネ14:16-17, 26；16:13）。言い換えれば、神は愛の次元において私たちの間で存在している。

さらに「信ずるもの〔信仰者〕には自らが愛されたごとく愛し、自分自身のごとく自らの隣人を愛すべきこと」とは、ヨハネ福音書13章34節「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」およびマタイ福音書22章39節「第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい』』という二つの聖句を前提にしている。

キルケゴールはこの二つの聖句を、すべての隣人愛に当てはまる二つの公式として規定しているようである¹⁷⁾。すなわち、神が私たちが愛したように、私たちは隣人を愛することを考えねばならない。それと同時に私たちの愛には限界があり、私たちがなしうる最善のことは、私たちが自分のように隣人を愛することによって、神の愛になるべく接近することである。

ところでキルケゴールによると、私たちが求めるべき愛の源泉そのものは隠されている。愛はその果実（行動）によって知られうる（マタイ7:16）と同時に、ある意味で愛そのものは隠れたものの内に宿っている。

これらのどの道を辿っても、君は愛の秘められた発生源〔生成〕に侵入することはできない。神はこの世を照らす全ての光がそこから流れ出る光源の中に住まい給う。（中略）

愛の秘められた生命は最内奥にあり、底を究めることができない。そして、その場合にもさらに、現存在全体との究めがたい関連の内にある。静かな湖は誰の目にも触れることのない秘められた泉の中に深い底を有しているが、同じように、人間の愛も、神の愛の中にそれよりもさらに深い底を有しているのである¹⁸⁾。

「愛の秘められた発生源」とは神である。「静かな湖」とはアガペーを発生源にする人間の隣人愛である。湖底に泉がなければ、湖はかれてしまうように、神の愛がなければ、隣人愛も継続的なものにはならない。

ただし、キルケゴールによると、「愛の源泉の基底」を見ることは許されず、湖底の泉は秘められている。これはどういう意味だろうか。フェレイラの解釈を参考にすると、キルケゴールの考え方には二つの意味が含まれている¹⁹⁾。第一に愛の源泉は神であるから、神の愛は隠されている。なぜならば、神そのものは、隠れていて、不可視であるからである。

東方正教会の神学者ウラジーミル・ロースキイ（1903-1958）が語っているように、モーセは光の中で神を見たが（出エジプト3:1-6）、それは神そのものではなく、モーセは光という可視的なものを通過して暗黒に参入していく。実は、暗黒の中にあるものこそ神なのである。「暗黒」という言葉によって神はあらゆる存在者を超越しているということを指し示している²⁰⁾。これがキリスト教の神の超越性であり、それゆえ、キリスト教の神はあらゆる現象の背後に「隠れた神」として規定されてきた（イザヤ45:15）。

第二に愛の秘匿性は、それが賜物であるという事実の内にある。キルケゴール自身が述べているように、「愛自体は目で見るとすべきものではなく、だからまさしく信じなければならないも

の」であり、「無条件には、また簡単には知られるはずのないもの」である²¹⁾。

卑近な例を取り上げると、ある人間が自分のことを心底、愛しているかどうかは、客観的に認識されえないことがある。たとえその人が自分に親切に振る舞っていたとしても、そこに何か打算的動機があるのではないかと疑うこともできる。

ましてや目に見えない神が本当に自分を愛しているのかどうかは、合理的に証明される事柄ではない。自分が置かれている境遇が、神の賜物によるものであることを信じ、またそのことに感謝して神の掟に従うことによってはじめて神の愛の事実気づくのである。つまり、私たちの心の在り方が変わらないかぎり、神の愛はいつまでも隠されている。

3 義務としての隣人愛

イエスの第二の掟、すなわち、「隣人を自分のように愛しなさい」(マタイ22:39)という言葉は、人間の義務として解釈すべきなのだろうか。キルケゴールはそのように解釈する。彼によれば、「衝動と傾向性の愛」「直接的な愛」(つまり、人間のロマンチックな情熱や恋愛感情による愛)がそれ自身どのように楽しく、どのように幸福であり、どのように筆舌しがたく信頼に満ちたものであろうと、それは「変化することもありうる」のである²²⁾。

したがって、キルケゴールは、「愛することが義務である場合に限り、その場合に限り愛は永遠に保証されている」と述べている。そして、「愛すべし」という義務の言葉により、「愛はあらゆる変化からも永遠に守られている」²³⁾。

ここからわかるように、キルケゴールはキリスト教の隣人愛を世俗的な人間愛から切り離して位置づけることをしていない。人間の愛は、その対象によって本質的に異なることはない。恋愛感情も友情も、家族の愛情も隣人愛の一種として定立されている。ただし、それらが自然の愛情のみに基づくならば、それはまったく異なる感情に変化することがあるのである。

たとえば、キルケゴール自身が説明しているように、直接的な愛は、それ自身の内部で変化し、正反対のものに、つまり、憎しみに変化する恐れがある。憎しみとは、正反対のものになった一種の愛、「滅びた一つの愛」である。「奥底深くでは絶えず愛が燃え盛っている」²⁴⁾。

たとえば妻が夫を愛していても、夫に裏切られた場合には、彼女の愛は容易に嫉妬と憎しみに変化しうる。それは仏教でいうところの「煩惱」「渴愛」であり、理性でコントロールできない激しい欲望である。人間は煩惱に支配されているがゆえに、苦の生活から解放されない。そこでキルケゴールが主張しているように、人間は家族の関係においても、神の掟として互いに愛し合うことを自覚することによって自分の欲望や感情をコントロールすることができる。

ところが、神学者カール・バルト(1886-1968)は、キルケゴールのこのような見解を批判している。バルトの所見によると、アガペーとしての愛は「自由な行為」である。すなわち、利害関係や意図や目的を抜きにした、他者に対する「自己贈与」であり、自分にとって他者がそこにおり、自分に向かって立っているという事実に基づいた、他者に対する自由意志による自己贈与である。しかも、その愛は、神を根拠としている。すなわち、神が人間をまず愛したのであり、そして神を愛として認識することによって、人間は愛することを許され、愛さねばならず、また愛することを欲する²⁵⁾。

言い換えれば、神が愛の行為として「原像的・本源的」になしたことを、私たちは「模像的・比喩的」に行うように召喚されている。すなわち、私たちは第一次的愛としての神の愛に、第二次的愛として従うことを許されている。そこで人間の愛が神の愛に先行することは絶対にできない²⁶⁾。

要するに、バルトがいたいことは次のようなことである。私たちは神の愛をエネルギーとして受け取らなければ、他者を自由に愛することはできない。仮に他者を愛したとしても、それは自己愛の延長にすぎない。そのような愛はあくまでも自己を高めるという利己心に基づき、自分本位の愛に終始しているということである。そして、バルトはキルケゴールが隣人愛を義務として規定していることを批判する。

キルケゴールがそうしているように、与え解放する創造的な神の愛についてはまったく沈黙して、その代わりに「愛さなければならない」というむき出しの^{かいいい}誠命を、キリスト教的愛の根拠として語ることができる、というようなことではないのである。そのようなことをする聖書的理由はない。(中略) 命ぜられた愛、義務的に課せられ作興された愛は……、いわば壁に押しつけられ押しつぶされたエロース以上のものではあり得ないし、それによって人間が真に自分自身を^{ささ}献げるような愛ではない²⁷⁾。

このようにバルトの解釈によれば、真の隣人愛は、神の愛に基礎づけられることによって、はじめて自発的で作為のないもの、したがって、誠実な行為として行われる。ところが、愛を義務にした場合には、その前提が崩れ、それはプラトン哲学におけるエロース的なもの、つまり、自分に欠けたものを得たいと求める衝動に歪曲されてしまうというわけである。

たしかにキルケゴールの思想には、バルトが指摘するような問題が含まれているように思われる。キルケゴールの記述において愛することの義務が強調されているからである。

しかし、他方でもし私たちが神の愛を受け入れて、それを根拠にすれば、隣人を自発的に愛することができるだろうか。ものごとはそう簡単にはいかないだろう。愛の情熱は、持続しない。むしろ愛することを神からの課題として意識しない限り、愛の実践は絵にかいた餅にすぎない。

ところで、第一コリント書13章4節では「愛(アガペー)は……自慢しない」と書かれているが、「自慢する」περπερεύομαιとは、「自分を偉そうに見せびらかす」という意味である。ジャン・カルヴァン(1509-64)は、「自慢しない」という言葉を「自分のことを求めない」という意味として、つまり、「自己否定」の意味として理解している。人間の本性は、自分だけを愛するように傾かせるので、自分の利益を無視してほかの人々の利益のために配慮することを容易に許さない。

したがって、カルヴァンによると、「自分のことを求めない」ということを完遂するためには、私たちは「少なからぬ圧力を自己の本性に加えなければならないほどである」²⁸⁾。つまり、愛することのある種の義務として解釈することは、必ずしも聖書の思想と対立するわけではない。

すでに述べたように、キルケゴール自身、神が「愛の秘められた発生源」であり、神の愛がなければ、隣人愛は継続しないということを明示している。言い換えれば、愛とは人間—神—人間の関係であり、つまり、神が「中間規定」である²⁹⁾。この中間規定がなければ、アガペーとしての隣人愛は成立しない。

ただし、それを具体的に実行に移すためには、義務としての隣人愛という観念も否定できないだろう。すなわち、隣人愛を神から与えられた生涯の課題として受け止めながら、毎日をごすことが、キリスト者として、また人間として歩むべき道である。

注

- 1) Hagner, Donald A., Matthew 14-28: Word Biblical Commentary 33B, Dallas: Word Books, 1995, p. 648.
- 2) Evans, Craig A., Mark 8: 27-16: 20: Word Biblical Commentary 34B, Nashville: Thomas Nelson, 2001, p. 263.
- 3) Ibid., p. 264.
- 4) ディートリヒ・ボンハッフアー『現代キリスト教倫理』（『ボンハッフアー選集第4巻』）森野善右衛門訳、新教出版社、1978年、228-229ページ。
- 5) 同書、229-230ページ。
- 6) マルティン・ハイデッガー『シェリング講義』木田元ほか訳、新書館、1999年、249ページ。Heidegger, Martin, Schellings Abhandlung Über das Wesen der menschlichen Freiheit (1809), 2. Aufl., Tübingen: Max Niemeyer, S. 131.
- 7) 同書、245ページ。Ibid., S. 129.
- 8) 同書、250ページ。Ibid., S. 132.
- 9) 同書、255ページ。Ibid., S. 134.
- 10) ニコラウス・クザーヌス『神を観ることにについて』八巻和彦訳、岩波書店（岩波文庫）、2001年、13-14ページ。
- 11) 同書、26ページ。
- 12) 同書、36ページ。
- 13) 同書、112-114ページ。
- 14) Ferreira, M. Jamie, Love's Grateful Striving. A Commentary on Kierkegaard's Works of Love, Oxford: Oxford University Press, 2001, p. 14.
- 15) セーレン・キルケゴール『愛の業』（『キルケゴール著作全集第10巻』）尾崎和彦ほか訳、創言社、1991年、12ページ。
- 16) Ferreira, M. Jamie, op. cit., p. 18.
- 17) Idem.
- 18) セーレン・キルケゴール、前掲書、19ページ。
- 19) Ferreira, M. Jamie, op. cit., p. 22.
- 20) ウラジーミル・ロースキイ『キリスト教東方の神秘思想』宮本久雄訳、勁草書房、1986年、65-66ページ。
- 21) セーレン・キルケゴール、前掲書、25ページ。
- 22) 同書、48-51ページ。
- 23) 同書、53、56ページ。
- 24) 同書、56ページ。
- 25) カール・バルト『教会教義学 和解論Ⅱ/4』井上良雄訳、新教出版社、2001年、249-250ページ。
- 26) 同書、250-251ページ。
- 27) 同書、302ページ。

- 28) ジャン・カルヴァン『キリスト教綱要Ⅲ/1』渡辺信夫訳、新教出版社、2002年、199ページ。
- 29) セーレン・キェルケゴール、前掲書、157ページ。

(原稿受理 2008年3月18日)